

勇魚 ISANA

Apr. 1999 No.20

目次

- 建前と本音 . . . 1
米澤邦男
(社)自然資源保全協会 理事長
- クジラと隠れキリシタン . . . 2
石井 高
在イタリア ヴァイオリン製作マエストロ
- マカー族と鯨 . . . 5
~エコ・テロリズムの本質
ジョン・ビーティー
文化人類学者
- レンバタ島ラマレラのマッコウクジラ捕鯨 . . . 8
最近5年間の捕獲統計をもとに
小島曠太郎
ライター
- マカー族による捕鯨、1998年冬 . . . 11
ジョアン・ゴダート
「プリティッシュ・コロンビアの捕鯨の風景」著者

ごあいさつ

建前と本音

米澤邦男

(社)自然資源保全協会 理事長

世に流行ほど移ろい易いものはない。日本文化論でも、先頃、本音と建前を使いわけずる文化だとする説が一時流行した。流行には必ず仕掛人が存在するが、それはともかく、当時欧米マスコミの貿易摩擦関連記事（自動車だったか、何だったか）にも HONNE、TATEMAE が登場して、日本人はずりとする先入感を煽り立て、欧米世論にかなりの影響を及ぼした。洋の東西を問わず、両者を意識しない文化・社会などあるはずはないし、少なくとも捕鯨問題に係ったことのある人なら、即座に、それはそっちの話だろうと一蹴したに違いないが、何故かこの話、わが国内で大面目に論じられた。

さて、この話、東西似たようなものだとしても、彼等の建前に対する粘着力の強さは又別物である。典型的なのが捕鯨論争で、ここに来て先方の IWC 政府代表も、追いつめられた拳句、「捕鯨反対に国内世論以外、特段の理由はない。」（92 年京都会議本会議における米国代表の冒頭声明）と本音を吐くに至ったが、ここまで何と 20 年余り、驚くべきしつこさである。しかも、IWC 条約とは両立しえない恣意を他国に押しつけることだけは諦めないという居直ったわけで、ここまできるともう文明論の範疇の外である。

彼等の言う国内世論もいい加減なもので、その実は、巨大 NGO なる大企業とその政治ロビーに過ぎないが、先日、その一つである国際動物福祉基金（IFAW）の前会長の高額退職金が欧米マスコミの話題になった。2 年前に引退したブライアン・デービーズが、退職一時金 2 億 5 千万円その他、2005 年までの 7 年間に毎年 6 千万円近く、あわせて 6 億 1 千万円を受けるといっているのである。財源の相当部分を貧者の一燈に求め、無償の奉仕を説きながら、自らは仲間内の談合により頂けるだけ頂いたというわけである。

さすがに、この高額退職金には組織内からも非難の声が上がったというが、この手の話、巨大 NGO では珍しいことではない。集めた浄財は一切私しませんなどというのは、ほんの建前に過ぎないからである。

クジラと隠れキリシタン

石井 高

在イタリア ヴァイオリン製作マエストロ

私はイタリアのクレモナという町でヴァイオリンを作っている。十数年前になるが、ヴァイオリンに塗るニスがなかなかうまく仕上がらず、その壁につきあたっていた。クレモナの市庁舎にアンドレア・アマティ作のヴァイオリンの名器が展示されている。いかにしてこのようにすばらしいニスを塗ることができるのかと長い間随分悩んでいた。

この作品は 1566 年製作である。その後しばらくして、偶然に天正少年使節の本を手にとった。そこにはかれらが 1585 年にクレモナに来たことが述べられていた。旅の間、かれらはヴィオラなどの楽器を好んで弾いていた。また細かいことまで記録に残したという。かれらがクレモナに立ち寄ったのはアンドレア・アマティのヴァイオリンが出来てから 19 年後である。それならば楽器について、また塗られているニスについて何か記録に残っているはずだと考えた。ヴァイオリンは出来たばかりだから、ニスの色が故郷の夕日のような茜色だとか、妹の赤いほっぺたの色だとか、何か具体的に書いてあるはずだからと、天正使節のことを調べはじめた。それがわかれば今後の私の製作活動に大きなヒントになるからだ。結局はニスに関しては全く記録になかったのであるが、調べていくうちに次第に少年たちに情が移り、使節帰国後、秀吉の御前で演奏したときの楽器を復元するにいたった。

ところで 4 人の使節のなかに中浦ジュリアンがいた。最近、子孫の小佐々学氏の研究によって本名がわかった。小佐々甚吾という。長崎県西彼杵郡中浦城主小佐々甚五郎純吉の子である。小佐々家は戦国時代始めから江戸時代初期にかけて五島灘海域を支配、領有し、南蛮貿易を中心に活躍していた小佐々水軍の総帥である。その五島灘の平戸島の北西に生月という島がある。隠れキリシタンの島として有名であり、400 年以上たった今でもオラショというキリシタンの祈りのことばが口伝えで残っている。またこの島は江戸時代の捕鯨の根拠地であった。元禄 10 年（1697 年）刊行の人見必大著、「本朝食鑑」には肥州の諸島、平戸、大村の海上での捕鯨について述べている。「勇魚取絵詞」の生月御崎沖の項には捕鯨について、その方法、船団構成、報奨金などが詳しく説明されている。それによって持双船の操り方、また当時その地方で南蛮と呼ばれていたロクロの使い方（綱操り）に優れていたこと、特別な話（森）を用い

ていたことがわかる。書に、「鯨を捕る浦には商主、漁家、漁師、仲買人など 350 人ほどが集まり、肉、髭、牙、内臓などを交易して儲けるのである。一浦で一年に一鯨で捕鯨の費用が賄え、二鯨で漁師など全ての給料が賄え、三鯨ではその儲けは計算することもできない」とある。捕鯨には多額な費用がかかる。国守、県吏、富豪の資本の援助を仰がなければならなかった。当然なことに彼らは鯨のおかげ、漁師のおかげで懐が暖まったのである。

徳川幕府によってキリシタン禁教の弾圧が厳しくなっていた頃、生月を中心として捕鯨が盛んに行われた。中浦ジュリアンはこの地方の生まれである。9 年ほどの遣欧使節の務めを終え、禁教下の日本に戻って来た。役人の追及を逃れながら艱難辛苦の布教活動を続け、1633 年 10 月、65 才で長崎で殉教するまで、九州を中心にキリシタン信者を増やしていった。ジュリアンから洗礼を受けた生月地方の漁師も多かったのである。隠れながら細々と綿々とキリシタンの信仰を守り通して来たのは、彼らの強い信仰心があったのは勿論ではあるが、そのほかに捕鯨技術の卓抜さが彼らを救ったというか、幕府、藩、また長崎奉行所側の厳しい探索から逃れられた、言葉を変えて言えば黙認されていたのではないか、当局が鯨の恩恵を蒙っていたためではなかったかと、名前は失念してしまったが、以前ある研究家から聞いたことがある。もとより歴史書には記されていないが私にもどうしてもそう思われる。江戸時代をとおしてキリシタンが隠れおおせたのは、地理的な例外もあるが、五島灘の生月を中心としたこの地方一帯だったのである。

私はイタリアに住んで 30 年近くになる。今までいろいろな動物を食べてきた。野兎、カモシカ、鹿、猪、蛇、犬、猫、ウミガメ、小鳥などである。動物愛護の立場の人達から言わせればとんでもないことではあるが、そのことで今まで文句を言われたことはない。しかし鯨だけはヨーロッパで一度も食べたことがない。現物がないのだからいたしかたない。中学生だった昭和 33 年ごろ、高校受験期になった。家が貧しかったためどうしても学費の安い都立高校に入らなければならない。クラスの仲間と学校の図書室で夜遅くまで受験勉強に励んだ。毎晩 7 時の楽しみは仲間が交替で近くの揚げ物屋に行って買ってくる一枚 15 円のクジラカツだった。牛のわらじほどに見事に引き延ばしたものであった。少年時代の甘く辛い思い出はいつもクジラカツにつながる。幸い都立上野高校に入学できたのはクジラのお陰とも言える。それからいろいろなことがあって、ヴァイオリン作りとなりイタリアに渡り、しばらくぶりで日本に戻ったら、クジラを食べることができなくなっていた。

昨年 12 月クリスマス直前にネコイラズが注入されたクリスマスケーキがイ

タリアに出回った。実害はなかったがアニマリストが犯行を宣言した。理由はケーキには牛乳やバターを使うが、これは動物虐待になると言うのである。何かどこかが間違っているのではないか。欧米人は箸のような優雅なものを使わず、ナイフとフォークを使う狩猟民族である。店頭の子兎や子豚や子羊が逆さに吊り下げられていても美味そうだとはいうが、可哀想だとは言わない。自分たちの食べる動物は殺しても可哀想ではないのである。彼らに言わせればクジラを捕っては可哀想で、それを食べるのは残酷な人間なのである。大分以前になるが、日本観測隊は南極に太郎、次郎を含めて 11 頭のカラフト犬をやむを得ず残して来た。イギリスを中心に日本人に対して轟々たる非難の声があがった。曰く残酷な国民というわけである。その後、イギリス隊はその 2 倍以上の犬を南極に置いてきた。理由はやむを得なかったとのことである。その時には自己批判は一切しなかった。つまり自分たちに都合の良いように取り計らったのである。これが欧米の基本姿勢である。外交についても同様なことが言える。IWC のことは私にはよくわからないが、我々日本人にとって、はなはだ理不尽なことはわかる。日本側はいろいろ事情があるだろうが、どうしてももう少し日本に都合のよいように主張、対処できないのであろうか。詳しいことがわからないので勝手なことを申しあげるが、素人の私はそう考えるのである。

1999 年はフランシスコ・ザビエルが布教のため来日して 450 年になる。私は今年もまた日本に行くことになるが、今年こそ中浦ジュリアン、また隠れキリシタンを偲び、九州の西海、五島灘の茜色の夕日の海を望んで彼らの冥福を祈りながら、何の心配もなく、とびきり美味しいクジラの刺し身を味わい、一献傾けたいと心から願っている。

マカー族と鯨 ～エコ・テロリズムの本質

ジョン・ピーティー

文化人類学者

現代は文化相対主義の時代であり、民族と文化の多様性が保護されるべきであると声高に叫ばれてはいるが、実際にはそれは上辺だけのイメージに過ぎない。アメリカン・インディアンの場合を見るとそのことがよくわかる。今、「アメリカン・インディアン」という言葉は、意識的に「ネイティブ・アメリカン」という言葉に置き換えられようとしている。しかしこの新しい言葉も、実はインディアンの指導者たちが主張しているように、インディアンが自ら選んだものではなく、米国政府によって造語された言葉なのである。

私自身は、ネイティブ・アメリカンという言葉、イギリス、スペイン、ポルトガル、フランス等の西洋の強国の支配下におかれるようになった新世界の先住民の総称として使うようにしている。そのような観点からすると、ネイティブ・アメリカンとは、インディアンのみでなく、イヌイト、ハワイ諸島先住民、サモワ諸島先住民等、かつての主権を失ったすべての民族を含むことになる。それらの民族は、自らとは異質の侵略的な政府によって圧迫されているという点で共通しており、それゆえに同一の言葉で括られることが可能なのである。

なかでもアメリカン・インディアンは、周囲の社会によるイメージ作りと操作の対象とされてきた。インディアンは、環境保護的、神秘的、勇敢、冷静沈着、高潔、等々ポジティブな意味を持つ多くの言葉によって描かれてきた。しかし、被支配民族に対するこのような讃美は、インディアンを今日の惨めな状況に追い込んだ歴史的諸事実を隠蔽し、一般の人々にとって実態を見えにくいものになっている。さらに、世界の他の民族のようにインディアンも、良い点も悪い点も、また高潔なところも野卑なところもあわせ持っているにもかかわらず、非現実的なほど良いイメージだけが作り出されてしまう傾向にある。ある意味で、ポジティブなステレオタイプはインディアンを人間的でないものにし、あたかも現実世界の人々ではないかのように扱うことを許容してしまうところがある。時折、彼らの窮状について記されていることはあっても（ああ哀れなインディアンよ）、インディアンに対する基本的なイメージは「高貴な野蛮人」であり「自然に近い人々」なのである。

この「自然に近い人々」のイメージは非常に広範に行き渡っているので、初期の環境保護広告では、インディアン（実際にはアイアンアイズ・コーディーという芸名で知られたイタリア系米人が扮していた）が母なる大地に対する汚染に怒って涙を流している姿が描かれていたほどであった。

米国北西部海岸ワシントン州に住むワカシャン語系先住民のひとつであるマカー族の場合を考えてみよう。彼らは、エスキモーに次いで有名な捕鯨民族であるヌートカ族と近い関係にある。しかし、マカーについても、また彼らがヌートカのように捕鯨をしていたという事実についても、知っている人はあまりいない。しかし、そのマカーが自分たちの鯨に関わる文化を前面に押し出そうと決心したことは、一部の環境保護者にとって大きな問題となった。マカーは、海に出て鯨を（より正確には 1 頭の鯨を）捕ることを再開すると決めたのである。ここで重要なことは、マカーが捕獲を計画しているのは絶滅危惧種のリストからはずされている太平洋コク鯨だということである。

問題は 1 頭の鯨である。マカーが捕獲を許されたのは、たった 1 頭の鯨なのである！にもかかわらず我々米国民は、あたかも世の末、世紀末にふさわしい大規模な破滅的状况に直面しているかのように思いこまされてしまっている。そしてマカーは、突然賤民になり下がってしまった。恐らく、彼らは「環境を守り、母なる自然と調和して生きている」人々のリストから永久に追放されることになるだろう。ああ哀れなインディアンよ！

マカーは、自分たちには鯨を捕る権利（条約により合衆国政府から認められている）があると判断し、その権利を行使することを決めた。合衆国政府もそれに同意した。しかし、そのために彼らは非難され、叩かれ、種々の攻撃の対象とされてしまった。「鯨を救え、マカーに銛を打て」と書かれた看板が立てられた。マカー保留地の入りの標識には銃弾が撃ち込まれた。動物保護局から送られてきた手紙の中には、「あなた方が 14 世紀の魔女狩りと同様に無知で無学であるということを自ら証明する以外さしたる理由もなしに、私たちの地球のコク鯨を捕獲し傷つけようとして続けていることに関して・・・」というような一節さえあった。このようなことは、たとえ 1 秒たりとも許されるべきではない。この場合、一体魔女狩りをしているのは誰なのか疑わしくなる。実際、人間より動物の方が重要だと感じる人々は本当に正気なのか、疑わしい。

さらに興味深いのは、カナダの環境保護団体シーシェパードが米国の水域に居座ってマカー（今も米国の市民権を有しているはずである）を脅迫しているのに、米国政府は何もしないということである。我が米国は、他国の領土であってもその市民を助けるために侵入して爆撃さえすることがあるのに、外国の

船が自国の市民を脅かすことをしている。そんなこと考えられるだろうか！

米国における少数民族集団(時に米国以外の集団も含まれる)のほとんどは、自分たちの文化のうち政府と多数者が容認できると考える部分だけに認知が与えられる。すなわち、彼らは唄を歌い、踊りを踊り、民族料理を食べ、民族衣装を着ることくらいは、通常許されるのである。もちろん、それも米国基準の公序良俗に反しない限りにおいてという条件つきではあるが。

環境保護者の一部は、異民族の文化は(少なくともそのうち自分たちが容認することのできない部分は)博物館の陳列ケースの中に閉じこめられるべきだと考えている。西洋は寛容の重要性について語ってきた。しかし、自分たちが好まないものに関しては決して寛容ではなかった。実際は、自分たちの好むところと望むところに矛盾しない場合に限り寛容であるのがよい、ということなのである。

多文化的な国々は(また、ますます小さくなりつつある多文化的世界は)この小論ではとうてい論じることのできない複雑な問題を提起している。しかしたった1頭の鯨の捕獲が、マカー保留地で起きたような抗議の怒号や、いやがらせや、銃撃を正当化できるものかどうか、我々はよく考えてみなければならない。

レンバダ島ラマレラのマッコウクジラ捕鯨 最近5年間の捕獲統計をもとに

小島曠太郎

ライター

インドネシア東部レンバタ島のラマレラの民は、世界で唯一現在もマッコウクジラを対象に捕鯨を続けている。ここでは、手造りの木造帆船（プレダン）でクジラを追いかけ、銚手（ラマファ）がクジラめがけて海に飛び込んで離頭銚を打ち込むという、かつての日本の古式捕鯨を彷彿とさせる勇壮な狩猟を見ることができる。捕獲されたクジラは余すことなく利用され、そのクジラ肉を女性たちが行商によって主食の農作物と物々交換することにより、ラマレラの民は生計を立てている。

そこには独自の捕鯨文化を見ることができるが、小稿では1994年から98年までの5年間の捕獲統計に表れた数値をもとに、ラマレラの捕鯨を紹介してみたい。5年間のクジラ捕獲回数（出漁が可能な条件下で、クジラに遭遇し、銚を打ち込みかつ捕獲できた機会）は53回であり、捕獲頭数は121頭であった。年平均10.6回捕獲し、1回平均2.28頭、1年平均24.2頭が捕獲されたことになる（表2）。

本題にはいる前に、（表1）にある過去39年間の捕獲頭数を眺めてみると、まず目に付くのは1980年代の極端な不漁である。60～70年代には年平均20頭以上の捕獲があったが、1979年の15頭を最後に、80年代は年間一桁台にまで落ち込んでいる。これはおそらく、1979年7月18日に起きたラマレラ南東20キロにある海底火山の噴火が、クジラの採餌・回遊など生態系に影響を及ぼした結果だと思われる。1990年代に入ってからようやく捕獲数が増加し、95年に40頭という記録的な大漁になって以来、20年前のレベルまで回復し好漁が続いている。

それでは、はじめに5年間の月別の捕獲頭数をみることにする（表2）。ラマレラの漁期は、季節風による天候の関係で乾季にあたる5月から8月までである。5月1日に正式な海開け儀礼がとりおこなわれ、プレダン全19隻が出漁する。統計上も5・6月で50頭、捕獲頭数の41.3%と豊漁になっている。しかし、漁期でも7・8月になると捕獲回数7回で11頭に激減し、出漁はするがクジラの回遊が少なくなることを物語っている。

雨季に入る前の、無風で猛暑になる9・10・11月は漁にはまったく適さな

い季節であり、クジラはほとんど獲れていない。ちなみに、9月以降4月半ばまでは漁期ではないため出漁はせず、陸からクジラを目視した時の緊急出漁(バレオ)での捕獲である。

雨季の始まる12月半ばころから雌とその家族群が回遊してくるため、12月に獲れた4回の内訳をみると3頭・5頭各1回と、1回あたりの頭数が多くなっている。1月も引き続きバレオが多いが、本格的な雨季に入るため気象条件の不利からくる失敗も多く、バレオ出漁回数に比べて捕獲回数が少ないといえるだろう。2月は集中豪雨の時期であり、よほどの天候条件でないと海には出られないが、そのような幸運に恵まれると複数捕獲になる。例えば95年度は4日間で2回バレオ出漁して、5頭を捕獲している。

3月は降雨量が少なくなり、回遊も多くバレオ出漁の好機である。4月には天候をみて出漁する船もあり、実質的には漁期に入ったとみなすことができる。この2カ月で捕獲頭数の24%にあたる29頭が獲られている。このように、マッコウクジラは1月から6月までラマレラの海に数多く姿を見せ、気象条件の良い5~8月が漁期になっているが、捕獲数からみると3~6月がクジラ漁の最盛期といえるだろう。

次に、捕獲と月齢の関係を一覧表にしてみた(表3)。ラマレラでは朔・望の2日後が大潮、上・下弦の2日後が小潮になる。表をみると、欠けていく月の時が捕獲が多いが(表3-)、内訳をみると望から下弦に至るまで(表3-A・B)は大潮の影響がむしろ獲れていない。顕著なのは下弦を境に朔まで(表3-C・D)に全頭数の4割強の51頭が集中していることである。ラマレラの人は「欠けた月」、「暗い月」が空にあるときにはクジラがくる」と言うが、統計からも実証されている。

朔から満ちていく月(表3-)では朔から上弦前まで11回、上弦から望まで13回と平均的に獲れている。ただし、月を「痩せた月」と「太った月○」という見方で比較すると、(表3-)のような興味深い結果となった。

結論めいたことは何もいえないが、クジラ回遊の季節、出漁可能な気象条件、月と潮汐の関係など、さまざまな要素が複雑にからみあって、ラマレラのマッコウクジラ捕鯨は微妙なバランスの上に成立しているようである。

本稿は、(財団法人)味の素食の文化センターの『第9回 食文化研究助成』から助成をいただき、調査した報告の一部である。

(参考文献)

小島曠太郎 「クジラと少年の海」1997年理論社
小島曠太郎・江上幹幸 「クジラと生きる」1999年中公新書

(表1) 年別捕獲頭数(1960~98)と捕獲回数(94~98)

年	頭数	年	頭数	年	頭数	年	頭数	捕獲回数
60	26	70	87	80	-	90	12	
61	31	71	43	81	-	91	15	
62	-	72	36	82	8	92	10	
63	-	73	23	83	2	93	8	
64	-	74	23	84	7	94	10	7
65	34	75	21	85	11	95	40	18
66	15	76	-	86	9	96	18	7
67	25	77	21	87	7	97	22	8
68	43	78	15	88	7	98	31	13
69	56	79	15	89	4			

(備考：- は記録なし)

(表2) 5年間の月別捕獲回数と頭数・率(1994~98)

月	回数	頭数	率	月	回数	頭数	率
1月	4回	9頭	7.4%	8月	3回	4頭	3.3%
2月	3回	8頭	6.6%	9月	1回	1頭	0.8%
3月	6回	15頭	12.4%	10月	2回	2頭	1.7%
4月	6回	14頭	11.6%	11月	1回	1頭	0.8%
5月	11回	26頭	21.5%	12月	4回	10頭	8.3%
6月	8回	24頭	19.8%	合計	53回	121頭	100%
7月	4回	7頭	5.8%				

(表3) 5年間の捕獲回数・率、頭数・率と朔弦望の関係

(1回・1頭は捕獲日不明)

朔弦望		回数	率	頭数	率
朔望		24回	46.2%	54頭	45.0%
内 訳	A 朔	1回	1.9%	1頭	0.8%
	B 朔 上弦前	10回	19.3%	28頭	23.4%
	C 上弦	1回	1.9%	1頭	0.8%
	D 上弦 望	12回	23.1%	24頭	20.0%
望朔		28回	53.8%	66頭	55.0%
内 訳	A 望	1回	1.9%	2頭	1.7%
	B 望 下弦前	8回	15.4%	13頭	10.8%
	C 下弦	2回	3.8%	6頭	5.0%
	D 下弦 朔	17回	32.7%	45頭	37.5%
合計		52回	100%	120頭	100%
下弦 朔 上弦		30回	57.7%	80頭	66.7%
上弦 望 下弦		22回	42.3%	40頭	33.3%

マカー族による捕鯨、1998年冬

ジョアン・ゴダード

「ブリティッシュ・コロンビアの捕鯨の風景」著者

民族誌学者によれば、何千年もの間、現在のアメリカのワシントン州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州にあたる太平洋岸地域で男たちが捕鯨を行ってきた。彼らは、北極海と温暖なメキシコ礁湖の間を索餌回遊するために毎年2度沿岸水域を通過するカリフォルニア・コククジラを捕獲していた。

今日、原住民がこの事実を民族誌学者から学ぶ必要はない。土着民の捕鯨は今世紀初頭に中止されたが、バンクーバー島のヌーチャノスの住民とそのアメリカの同族であるオリンピック半島のファン・デ・フカ海峡の向かいに居住するマカー・インディアン部族の間には、豊かな文化的遺産が残っているからである。

マカー族は、米国政府との1855年協定による権利に基き捕鯨再開を希望することを1995年に発表し、国際社会の耳目を集めた。

米国政府は、何年にもわたり、自国アラスカ原住民のホッキョククジラ捕鯨の権利を擁護してきたが、ここでまた突如、捕鯨問題で世界の脚光を浴びることになった。米国は世界の反捕鯨運動のリーダーである。マカー族は米国政府の承認なしに、捕鯨を開始する合法的権利をもっていたが、米国政府を通じ国際捕鯨委員会（IWC）に原住民捕鯨クォータ（捕獲枠）を申請する道を選んだ。

この捕鯨再開の申請をめぐり、3年にわたり国際的論議が沸騰したが、最終的にマカー族はモナコで行われた第49回IWC年次会議でコククジラの捕獲枠を勝ち取った。それでも、結果的にはコククジラの捕獲がこれまでより増えることにはならなかった。ロシアのチュクトカ土着民は少なくとも2000年間にわたり、コククジラの捕獲を続けてきた。近年、彼らのIWC原住民捕鯨クォータは年間179頭に上ったが、コククジラ資源は増加し続けた。1998年からの5年間にわたり、年平均4頭というマカー族のためのクォータは、ロシアの年平均120頭というクォータと合体されている。

東太平洋コククジラ資源は、19世紀の商業捕鯨で激減し、1946年に商業捕鯨から保護された。同系群が米国の「絶滅危惧種リスト」から除外された1994年には、商業捕鯨開始前の推定資源レベルを上回る22,000頭以上に増加していた。「ロシアで文化的・原住民生存捕鯨が続いている間に、同系群は

回復したことになる。

マカー族に IWC のクォータが認められると、鯨保護主義者から不当な行為だとの声が上がった。彼らの言い分は、「マカー族は原住民のための文化的・生存捕鯨クォータを受ける資格がない。つまり、マカー族は 70 年もの間、鯨肉を食べておらず、多くの食生活の選択肢をもち、20 世紀後半にはアメリカのどんな小さな町がもつ快適さも享受している」というものだ。保護グループは、したがって、マカー族は「文明」の主流に自らをあわせるべきだと強く主張した。

世界捕鯨者会議のトム・メクスス・ハッピーヌク議長が「勇魚」1998 年 12 月号でヌーチャノスとその同族のマカー族にとって捕鯨がどんな意味をもつかを説いたが、反対派は聞く耳をもたなかった。

マカー族の捕鯨は、実際の用途をもつと同時に伝統的であり、かつ、安全要因と IWC の人道的捕殺に関する要件を満たすものでなければならない。杉の木を手で彫った 36 フィートの伝統的な捕鯨カヌーが使われる。それに 8 人の漕ぎ手が乗る。船上の銃撃ちがロープと浮きを付けたおよそ 7 フィートの木製の柄の先につけられたステンレス製の銃を投げる。銃がクジラに命中すると、クジラをできるかぎり迅速に致死させるために、口径 0.5 インチの弾頭を装填した強力なライフルを発射する。

マカー族は鯨肉を販売の対象とせず、儀式と個人的消費に限定することで米国政府と合意をかわしている。伝統的儀式、共同体内での協力、チームワークと危険な作業への献身を通じて、コククジラ捕獲との関係を復活することは、その文化の重要な一部を再現することを目的としていた。鯨に対する敬意と沿岸域で資源が枯渇しないよう配慮すること--これが終始クジラとマカー族の間関係の本質的部分であった。持続可能なクジラの利用は昔からすでに実施されていたのだ。

米国での反捕鯨運動にはペット愛護者を代表する多くのグループが含まれるが、最も声高な抗議グループは、ここ数十年の間、捕鯨を国際的な政治問題に仕立て上げた連中である。彼らは、自らのビジネスを維持する必要に迫られているところから、今や「抗議産業」と呼ばれている。

マカー族の捕獲が確定すると、抗議のレトリックが変化した。この捕獲が IWC の原住民生存捕鯨のカテゴリーに入らないという非難は下火になり、代わりに動物権とエコツーリズムに利害を持つグループが捕獲に反対する感情的訴えを繰り返すようになった。しかし、こうした「抗議産業」が最も心配していることは、IWC に対するコントロールを失うことのように。つまり、マカー

族の捕鯨が IWC の捕鯨モラトリアムに終止符を打つことを恐れていたのである。反対派は、日本に鯨肉の不正な貿易があると合わせて非難した。彼らによれば、日本は自国の小型沿岸捕鯨の暫定枠を求めるため、文化的な原住民と生存捕鯨の新しい解釈を利用しており、マカー族の捕鯨が商業捕鯨再開のための最前線になっているというのだ。

反捕鯨グループは自らの主張を正当化するため、事実をひどく歪曲した。偽りの記述がインターネット・サイトや刊行物で発表されると、情報をもたない一般大衆はそれを事実として受け入れる。かくして、歪曲されたイメージはますます拡大し強固になっていった。

主要な反捕鯨グループがマカー族の捕鯨に声高に反対しているが、クジラを守るために、実際にマカー族居住地区に乗り込んだのはシー・シェパードだけだった。目立つ行動にでるのがシー・シェパードの商売の手口である。ポール・ワトソンのマカー族捕鯨への反対運動は、同類の目立ちたがり屋の連中と意気投合していた。10月初旬に「クジラの守護者」小艦隊がニア湾沖に錨を下ろした。その構成は、180フィートのシー・シェパード号（ブルーのクジラの絵をあしらった旧ノルウェー漁船）、サイレニアン号（もと米国沿岸警備隊で使われていた95フィートの黒塗りカッター・ボート）、シャチの形をした小潜水艇、数隻のゴムボートであった。

ホエール・ウォッチング・ビジネスを代表する多くの抗議グループが、ゴムボートやカヤックと小動力船でワトソンの小艦隊を支援した。彼らは、マカー族領土で歓迎されず、大部分がニア湾から海路で約15分の所にある居留地続く沿岸で、キャンプをしたり、小屋を借りたりしていた。デモ隊はニア湾でマカ族の埠頭の使用を拒否されたため、彼らがポール・ワトソンの船に補給を続けた。彼らは、マカー族の捕鯨カヌーを追跡するシー・シェパードの斥候部隊と合流した。マカー族は、沿岸近くに居ついている少数のコククジラの捕獲を禁じられている。これらのコククジラは、デモ隊の連中のペットになり、それぞれ愛称を与えられた。捕鯨カヌーが漁場に向かったとの警報が鳴るとすぐに、彼らはマカー族が違法の捕獲を行うと確信し、クジラを取り囲んで守るために現場に急いだ。

しかし、反対派の2カ月間にわたる寝ずの努力に要した膨大な出費は報われることがなかった。荒れる海の中で濡れながら寒さに震え、錨にしがみついた惨めさも、延々と続く退屈な時間も無に帰した。結局のところ鯨の捕獲は行われなかったのである。この水域に回遊してくる鯨は、いつもより遅れた時期に、はるか沖合いを通過していた。合意された捕獲開始日の後の天候が悪化し、空

からさえもクジラの発見ができなかった。

ポール・ワトソンは、11月下旬に米国司法当局がマカー族とシー・シェパードの代表者の間の会合を提案したとき、安堵を覚えたかもしれない。その会合は、シー・シェパード船団がニア湾を離れるという条件で行われるはずだった。マカ族が捕鯨を断行するとの堅い決意を固守したため、その会合は反対派の勝利にはならなかった。けれども、ワトソンは事態を投げ出したという印象を与えることなく去ることができた。かくしてシー・シェパード号、ミニ潜水艦、サイレニアン号はニア湾を離れた。ワトソンは、「シー・シェパードは春には必ず戻ってくる」と豪語した。

世界全体が注目した鯨の捕獲は起こらなかった。鯨を救出している場面の写真も、捕鯨現場の写真も撮影されなかった。なんの行動もなく、ストーリーもなかった。10月初旬に捕鯨カヌーに群がっていたマスコミはずっと以前に去っていた。

冬の強風が今フラテリー岬の岩だらけの岸を打ち、滝のような豪雨がニア湾の村の道路を洗っている。これはこの時期には珍しい光景ではない。春が再びおとずれ、また鯨も戻って来るだろう。